

【氏名】 茅根 紀子

【所属大学院】（助成決定時）

早稲田大学大学院 文学研究科 芸術学（美術史）

【研究題目】

中世・ルネサンス期の医学における美術の機能 ―聖アントニウス修道会の事例に関して

【研究の目的】

聖アントニウス修道会は、中世における三大疾患の一つである麦角病撲滅の為に、1095年小さな兄弟会として設立されたことに始まる。修道会は、医療活動における大きな成果、戦略的な分院建設や版画を用いたプロパガンダによって宗教改革期までヨーロッパ全土で権勢を振るった。本修道院の特筆すべき点は、医療施設として始まったという特殊性に加え、美術史に与えた深い影響である。一方、個々の美術研究は膨大にもかかわらず、聖アントニウス修道会美術という大きな視野から俯瞰的に研究したものは見られない。この為に、西欧美術史における聖アントニウス修道会の重要性が十分に認識されているとは言い難い。編年史的な問題は明らかにされつつあるが、修道会の精神的背景は未だ十分な考察はなされていない。医療活動を含めた聖アントニウス修道会の実態を包括的に研究することを通じて、それらがどのように美術制作に影響を及ぼしたのかを明らかにするのが本研究の目的である。

【研究の内容・方法】

・研究の内容

本研究は大きく分けて以下のようなプロセスを経て、約4年をかけて遂行されるものである。①聖アントニウス修道会に関する文字資料・図像資料の収集・電子データベース化を行い、研究全体の基盤を固める。（貴財団からの助成金はここにあてた）②神学史・教会史における聖アントニウス修道会の位置を確認する。③中世・ルネサンスにおける医学思想史と聖アントニウス修道会の影響関係を考察する。④上記の考察を総括し、聖アントニウス修道会と美術に関する包括的な結論を導く。

・研究の方法

①の遂行にあたり、本夏7月12日から8月11日までひと月、ミュンヘンに拠点を置きながらドイツ・フランスにて調査を行った。ミュンヘンには世界的な美術史図書館である中央美術史研究所があり、西欧美術に関する二次文献の収集が容易である。また、その他の文献についても州立図書館・大学図書館において収集が可能である。フランスへのアクセスも良い為、ミュンヘンを拠点とした。

7月25日から26日まで、聖アントニウス修道会博物館のあるメーミンゲンにて調査を行った。メーミンゲンには博物館のほかに、聖アントニウス修道会関係の建築が多く残っており、土地の教会にもメーミンゲンの分院の与えた影響が残っている。7月27日から31日まで、聖アントニウス修道会

の総本山である母修道院が残る、フランス南東部サンタントワーヌ・アン・ヴィアンノワの調査を行った。サンタントワーヌ・アン・ヴィアンノワには修道院教会を中心とした一連の修道院建築が残っており、聖アントニウス修道会博物館もある。7月31日から8月4日まで、リヨンにて聖アントニウス修道会関係の一次資料の収集を行った。この後ミュンヘンへ帰り、さらなる二次文献の収集にあたった。

【結論・考察】

ミュンヘンでは二次文献を十分に集めることが出来たが、修道院の総本山であるサンタントワーヌ・アン・ヴィアンノワの母修道院教会に関する研究が殆ど無く、研究の余地が十分にあることが分かった。メーミンゲンでは当時の建築内部の様子を残すものは殆ど見られなかった。サンタントワーヌ・アン・ヴィアンノワでは、宗教戦争時に大きく破壊されたものの、創建当時の修道院教会フレスコがよく残っていることがわかった。リヨンでは16世紀に出版された最初の聖アントニウス修道会史を入手することができた。これらの収集した一次文献、画像資料は電子データとしてまとめた。これからの課題としては、ひとまず母修道院教会に焦点を定めて研究を行っていく。中央集権的な聖アントニウス修道会の総本山にあり、その中でも最重要建築である修道院教会のフレスコ画装飾を読み解き、修道会の活動と絡めて包括的に考察することは本研究における大きな柱となるだろう。